

# 命の大切さ 絵本に込めて

宮城・七十七銀行屋上で息子が犠牲

## 田村孝行さん、弘美さん夫妻

東日本大震災の教訓を伝える絵本の原案をつかった田村孝行さん、弘美さん夫妻。背後の木は、健太さんが登っていた月桂樹だ。宮城県松島町（天島康弘撮影）



たむら・たかゆき、ひろみ  
七十七銀行女川支店の行員だった息子の健太（けんた）さんが、同僚とともに支店屋上で津波の犠牲になった。企業防災の観点などから、伝承活動や講演を行っている。命の大切さを伝える一般社団法人「健太いのちの教室」を設立した。

大学時代、軟式野球部のユニフォーム姿の田村健太さん（田村孝行さん提供）



### 「いの中」に健太は生きている

次代へ  
そして  
能登へ

東日本大震災13年

⑤

元氣な赤ちゃんの誕生を喜ぶ夫婦。成長した男の子は木に登ったり、野球に夢中になったり。大人になるとあこがれの会社に就職できた。何げない種やかな日常の幸せにあふれていた明るい色合いのページが突然、暗転する。描かれるのは、「あの日」。激しい揺れ、鳴り響く防災無線……。巨大な黒い波が建物の上に避難した人たちのをのみこんでいく。息子

を捜す両親は暗闇をさまよっていた。「子供たちに読んでもらいた。万が一、自分がこうなったらお父さんやお母さんはとてもさみしい思いをする。自分の命を守るこの大切さを感じてほしい」

東日本大震災の津波で、七十七銀行女川支店（宮城県女川町）で勤務していた長男の健太さん（当時25歳）を失った。支店内にいた行員らは支店長の指示で2階建ての屋上に避難したが、津波にのまれ、4人が死に、現在も8人が行方不明だ。支店に近い高台の山に逃げたければ救えたはずの命。海の近くにあった町内4つの金融機関の従業員は山に逃げるなどして全員無事だった。想定外の出来事を前に企業の下した判断が明暗を分けた。孝行さんは話す。

「もう誰にもつらい経験をしてほしいくない。同じ悲劇を繰り返さないために、形に残るものを作りたい。震災以降、毎週、女川町に通いつつ、出会う人に震災のことを語るようになつていった田村さん夫妻。絵本の制作を協力をしたのも女川で出会った人たちだ。首都圏に住むミュージシャンの木村真紀さん、井戸雀瑠璃さん、渡辺麻美さんとアロシエクトを立ち上げた。全員が絵本の制作に携わるのは初めてだった。手探りの中で、宮城県大崎市に住む田村さん夫妻と横浜なごをリモートでつなぎ、やり取りした。やわらかい言葉で、短い文で、何度も推敲した。色使いなど細部にもこだわり、納得いくまで絵を書き直してもらった。とくに津波の恐ろしさは伝えたかった。「津波の絵は怖いかも

しれないが、波が迫ってくる様子は恐怖感が分かるようにしないと伝わらないと思った」

弘美さんは話す。

今年の元日には能登半島を地震が襲った。災害は時も場所も選ばない。救えたはずの命が失われるように。伝えたい。その思いは絵本という形で結実していった。健太さんを失った悲しみから少しずつ立ち直ろうとする田村さん夫妻。絵本のページをめくっていくと、その歩みと気持ちの変化とともに色彩も明るさを帯びてゆく。

田村さん夫妻は同県松島町にある弘美さんの実家の畑を「健太いのちの農園」と名付けた。毎年、多くの人が訪れ、野菜を収穫したり、ともに食事をしたりする憩いの場になった。健太さんが小さいころにいつも登っていた月桂樹の木はいまも深緑の葉を揺らしている。絵本の最後には、子供たちの前で話をする田村さん夫妻のこれまでの活動とそれを見守る健太さんがいる。その一つ一つが光のしずくに包まれている。命の大切さ、喜び、絶望、悲しみ、そして希望も。

「安かたちは見えなくなったらけれど、健太はわたしたちといつも一緒に活動している。悲しいだけじゃない。この本の中にも健太は生きています。いつも中心にいて見守ってくれている」

絵本は3月19日に完成する予定だ。（大渡美咲）

東日本大震災から13年。その教訓や思いを次代へ、そして、必ず起きる未来の災害のために、なごうとしている人がいる。その姿を追った。